

大変身!

赤川次郎

ママの七つの顔



大変身！

ママのせうの顔

亦川次郎

だいへんしん
大变身！

ママの七つの顔

一九九九年(平成十一年)四月十八日 第一刷

著者 赤川次郎

©1999, Jirou Akagawa

編集人 田口武雄

発行人 黒埼精三

発行所 読売新聞社

東京都千代田区大手町一七一一 一〇〇八〇五五

大阪市北区野崎町五九 二五三〇八五五一

北九州市小倉北区明和町一一二 二八〇二八五七一

名古屋市中区栄一一七一六 二四六〇八四七〇

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 大口製本印刷株式会社

定価はカバーに表示してあります。

Printed in Japan

落丁・乱丁の場合は、お取り替えいたします

大変身！

ママの七つの顔◆目次

舞台裏	7
小切手	21
運命	34
隣の声	46
隣の週刊誌	58
駆け落ち	70
疲労	82
荒らされて	95

かけ忘れた鍵	107
一步、踏み出す	119
襲撃	132
血の背信	146
逃走	158
恩人	170
二つの痛み	182





夢の裏側	268
最悪の事態	256
木かげの女	243
手配	231
やけっぱち	219
トラック選び	207
嬉しくない再会	195

期待	367
別離	355
潜入	344
爆破	330
絶望の後	318
捨て身	306
誘惑の囁き	294
最後の賭け	280

装丁 熊谷博人
装画・本文イラスト 畑農照雄

大変身！

ママの七つの顔

舞台裏

ステージからは、子供たちの歌うオープニングのメロディーが聞こえていた。子供たちがステージの上を移動する足音がドタドタと地響きのように聞こえ、背景の画割がミシミシと音をたてて揺れる。

もう古いから仕方ないけど……。

大丈夫かしら、と畑山恵利は舞台裏に入って、少し心配げに足を止め、様子を見ていた。大丈夫。——劇は順調に進んでいる。

腕時計を見て、十分遅れで始まったことを確かめる。大体予想通りだ。

日曜日とはいえ、会社が休みという父母ばかりではない。

それでも、この劇はN学園小学校学芸会の最大の「目玉」である。少しでも多くの父母に見てほしいと願って、プログラムの後半、一番来場者の多いところに持って来た。

それは成功だったようだ。受付の先生が、

「いつもの年よりずっと多いわ」

と言ってくれて、畑山恵利もホツとした。

舞台裏は、袖の方ともつながっていなくて、仕切られた細長い空間である。古い建物なので、この講堂にも、「どうしてこうなってるの？」と首をかしげなくなる場所がいくつもあって、しかも誰に訊いても分らない。ここもそういう場所の一つである。

物置と化して、去年の学芸会で使った小道具なんかが、ちゃんと片付けたはずなのに、どうしてか転っている。「あらあら……」

何かをけとばして、よく見ると、案山子^{かかし}である。

これって、確か……三年くらい前の学芸会で使ったんじゃないかしら？

埃のつもった、その案山子は、たぶんどこかの農家でもらって来た本物^{ほんぶつ}だろう。

毎年毎年、幹事に選ばれた先生たちの苦労は並大抵のものではない。——人ごとじゃなくて、今年は恵利が幹事の一人。

でも、ともかく今日の本番が終れば……。

反省会とか、理事会への報告とか、色々細かいことは残っているが、それはまあ大したことじゃない。

——畑山恵利は、このN学園小学校の教師で、三十一歳。二十代に見られる、若々しい体つきと童顔。

これでも三歳の子の母親で、夫は大企業に勤めるエンジニア。教師としての仕事を除いて

も、かなり忙しい身である。

今日の学芸会のために、この二か月ほどは普段に倍する忙しさだった。夫にも無理を言っ
し、娘の珠子たまこにも寂しい思いをさせた。

すんだら、三人で温泉にでも行きたい。

といって、秋には長い休みもない。結局、年末年始の休みになってしまっ
た。

——ステージでは、「ミュージカル風」の劇が、特にハプニングもなく進行しているよう
だ。

ガタツと音がして、振り向くと、

「失礼します……」

薄暗い中、戸口にシルエットで浮んでいるのは、長いコートをはおってソフト帽をかぶった
男で……。

「何か？」

と、恵利は歩いて行っ

「ここは……講堂の入口ですか？」

「いえ」

急いで付け加え、「ここは舞台裏なんです。小さな声で」

「や、こりゃ失礼」

白髪の、上品な感じの紳士である。

「父母の方ですか？」

「孫が出ています……」

「それじゃ、一旦出られて、右手へ回って下さい。建物に沿って行けば、入口に出ますから」

「どうも申しわけない。ここが入口かと思って」

「駐車場からおいでですね？　そうするとここが近いんで、よく間違える方がいらっしやるんですよ」

恵利は、外へ出て、「こっちの方へ」

と指さした。

足音がして、黒いスーツの男が急いでやって来た。

「社長！」

「もう分った。こちらの方が教えて下さった。——先生でいらっしゃる？」

「はい。三年生を受け持っております」

「それはそれは……」

と会釈して、「では急いで入口の方へ……」

「まだ始まったばかりです。大丈夫ですわ」

と、恵利は微笑んだ。

「行くぞ」

と、その老紳士は、部下へ声をかけたが――。

恵利は、二、三歩行つたところでその老紳士が、突然膝をついてしまふのを見て、びっくりした。

「どうなさつたんです？」

「社長！」

老紳士は胸を押えて、青ざめた顔で言つた。

「発作です……。大丈夫……」

「どこかへ……。さ、中で腰をおろして」

恵利は、他へ連れて行くには遠すぎるので、ともかく舞台裏へ入れ、積んであつた木箱に座らせた。

「薬……。薬だ……」

「社長――。申しわけありません。車の中に忘れて来ました！」

部下の男があわてて、「すぐ取って来ます」

「早くしろ」

男が駆け出して行くと、恵利は、

「ボタンを外しましょうか、ワイシャツの」

「申しわけない……。こんな時に」

苦しそうではあるが、やや落ちついたらしく、「薬をのむのに……。恐縮ですが、水を一杯……」

「あ、そうですね。待ってて下さい」

恵利は、外へ出ると、裏側を回って行こうと思った。外に手を洗う場所があり、プラスチックのコップもあるはずで、そこが一番近い。

角を曲ろうとして、

「本当だな？」

という声に足を止める。

「今、発作を起して動けないでいる。チャンスだ」

その声……。

あれは薬を取りに行った部下の男だ。

そつと覗いてみると、あの男と、やはりコートをはおった男が三人、一見して、ただごとでない雰囲気。

「一人か？」

「女が一緒だ」

「女？」

「ここの教師だ。社長のそばについてる」

「——どうする？」

三人の男が顔を見合せたが、

「こっちの顔を見られたら、教師だって何だって、生かしちゃおけねえ」

一人が言って、コートの前を開けると、銃を取り出した。——散弾銃だ。

「今なら間違いなくやれる」

と、部下の男は言って、「任せるぜ」

と、駆けて行ってしまった。

——恵利は、自分の見たことが信じられない思いだったが、しかし、あの散弾銃は幻ではない！

何なの、一体？

あわてて駆け戻ると、

「あの……誰だか……三人組が」

言葉が出て来ない。

「どうしたんです？」

「銃を持った人が……こっちへ来ます」

老紳士の顔に、一瞬悔しげな影がよぎった。

「そうか。——仕方ない。私は逃げられん。先生、早く逃げて下さい」

「でも——」

「一緒に殺されます。急いで」

老紳士は苦しげに呻いた。

「しっかり……しっかりして下さい」

今から逃げても、あの三人の目に入ってしまうだろう。

どうしよう？——といっても、一体何が起っているのか、恵利には見当もつかなかった……。

三人の男が、戸口に現われた。

「奥だ」

奥の方の薄暗い場所に、コートを着てソフト帽をかぶった「社長」が座っている。

「手早くやるんだ」

二人は拳銃を抜き、一人は散弾銃を構えて、踏み込んでくる。

「——この歌、知ってるぜ」

と、一人が言った。「小さいころ歌った」

「黙ってやれ」